

FIT (家族イメージ法) の基礎的研究

大熊保彦* 下小園愛** 高瀬絵理***

OHKUMA Yasuhiko, SHIMOKOZONO Ai, TAKASE Eri

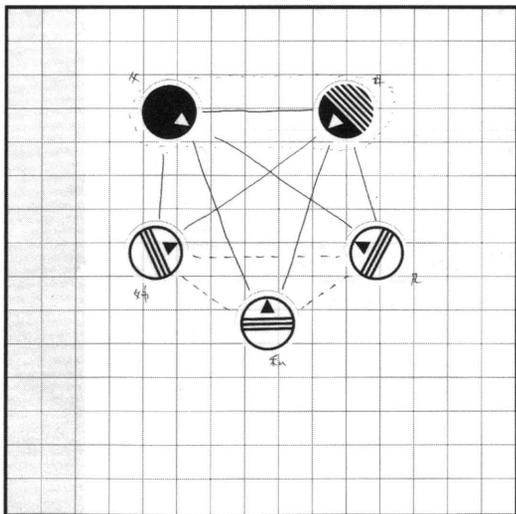
FIT (家族イメージ法) とは、家族メンバーにみたてた円形のシールを 15cm 四方の枠の中に配置させることで、その者が感じている家族関係を把握しようとする方法である。シールは 5 種類あり、その意図は濃淡によってメンバーの〈力〉を表現することにある。また、シールに描かれた三角形はメンバーの〈向き〉(関心の方向)を示している。

本研究では、現実の家族と理想の家族を表現させ、そのイメージの差を検討した。ここでは、特徴的な 2 事例について述べる。

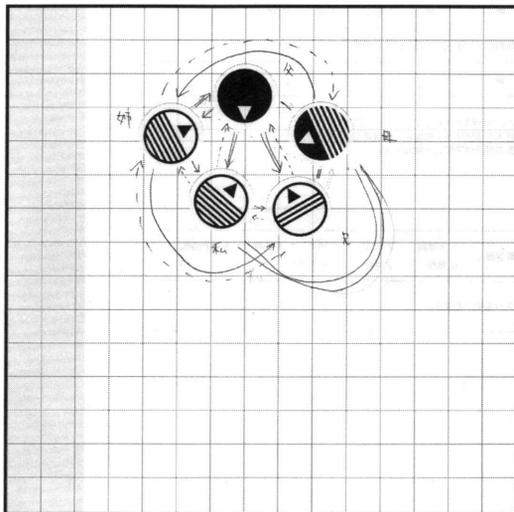
事例 1.

被験者：21 歳女子

(理想)



(現実)



被験者が抱えている理想の家族イメージと現実の家族イメージを比較すると、両者に共通しているのは、家族成員が相互に向き合っている点と隣り合っている成員どうしの距離がほぼ等しい点である。このことは、凝集性が高いいわゆる仲の良い家族であるという理想が、現実において実現されていることを示している。それに対して理想と現実の相違点を見ると、理想の家族においては成員間の距離が離れていることがわかる。つまり、被験者にとって、現実の家族関係はあまりにも凝集性が高すぎ、家族関係の濃密さから逃れて個としての自由を求めていることがうかがわれる。これは被験者の年齢からして妥当な思いであろう。また現実ではきょうだい間で力関係がアンバランスであり、きょうだい間でより平等な関係でありたいという願望が、理想の家族イメージに表現されているといっていだろう。

* 東京家政大学心理カウンセリング学科

** 東京都共済組合精神保健相談相談員

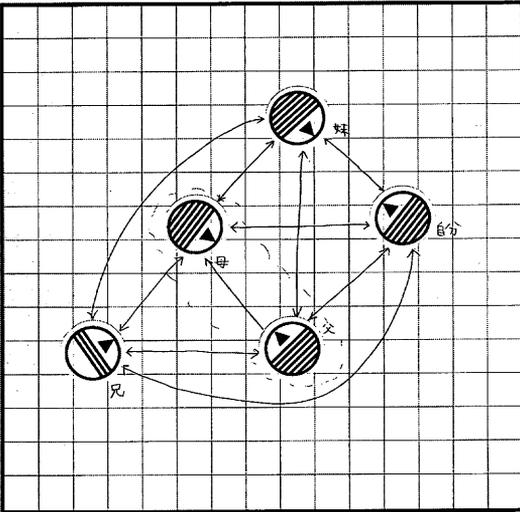
*** 東京都スクールカウンセラー

事例 2.

被験者：20 歳女子

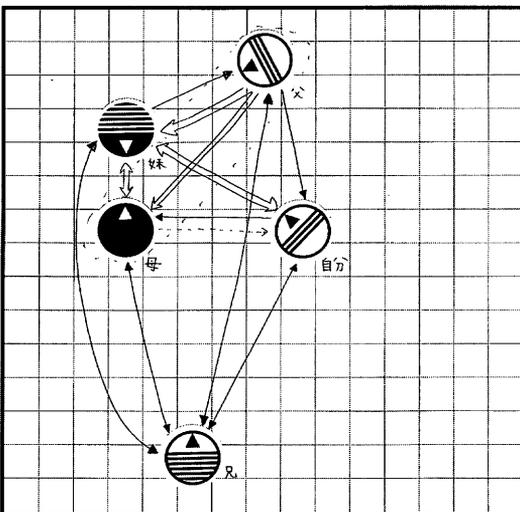
注：兄は家を離れて自活している。

〈理想〉



しもそうしたことが起きれば、たとえば母親の過保護・過干渉あるいは妹の過度の依存が指摘される可能性を含んでいる。このことを踏まえて理想の家族イメージをみると、母と妹の強い結合や力のアンバランスが解消されていることが明らかである。このとき注目すべき点は、単に母-妹関係だけが変化しているのではなく、父、私、兄を含んだ家族全体の関係や力も変化していることである。ここには家族をシステムとしてとらえることの重要性が示されており、たとえば臨床場面において、母-娘関係を取り出してその解決を図るのではなく、他の家族成員を同時に視野に入れてアプローチすべきことが示唆されているといえよう。

〈現実〉



事例 1 とは異なり、理想と現実では全く異なった様相を示している。現実では、母と妹が強く結びついており、力も両者が非常に強い。この関係は一部の家族成員の問題行動や家族全体の機能不全として顕在化してはいないが、も